高原の風だより

２０２２（令和４）年７月　発行　　＜第２３号＞

～高知県馬路村で全国まちづくり交流会～

特産のゆずで村おこし

全国まちづくり交流会が６月３日から５日まで高知県安芸郡馬路村で行われた。コロナ禍でようやく３年ぶりの開催になった同大会には、全国から 100 名余りが集まり、地元の温かいもてなしを受け充実した３日間を過ごした。木曽町からは開田高原倶楽部の会員など４人が参加。

なぜ馬路村が特産のゆずで村おこしに成功したのか。今年３月まで農協組合長として長年取り組んできた東谷望史実行委員長から、課長時代の苦労話をはじめ現在に至るまでのさまざまな貴重な話を伺うことができた。ゆずは西日本各地に存在する。その中で、なぜ馬路村がこれほどまで有名になったのか。村おこしのヒントがそこに隠されているのではないかと思う。

黒を基調とし自然に溶け込むように配慮された馬路村農協の「ゆずの森加工場」

自然景観に配慮したゆず加工場　　～外壁には村産杉と漆喰（しっくい）を使用～

高知空港から車で約１時間 40 分。馬路村の入口に「ゆずの森加工場」がある。平成 18 年に完成した新工場は鉄筋２階建て、延べ床面積約 1500 ㎡。加工場のほか受注センターや新商品の開発研究室、商品パンフレットなどを作成するデザインルームなどを備えている。総事業費は約 11 億 5000 万円。主力商品の「ごっくん馬路村」を年間１千万本以上生産することができる。

建物は黒を基調とするとともに、外壁には村産杉と漆喰をふんだんに使用するなど、周囲の自然に溶け込むように配慮されている。また、敷地にはコナラやモミジなど広葉樹が約 700 本植栽されており、訪れた観光客らがゆっくり散策できるように工夫されている。

広葉樹が植えられた敷地

人口 800 人　馬路村農協の挑戦

ゆずで 30 億円の売上と 100 人の雇用

補助金使えて、民間に負けるわけがない

交流会のパンフレット

ユズ加工品の数々

熱く語る東谷望史前組合長

馬路村農協が成功した秘訣は　～東谷前組合長が語る３つのポイント～

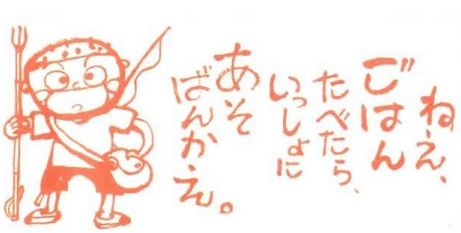
高知県の東部に位置する人口 800 人余りの馬路村。96%以上が森林に覆われ、耕地はわずか。基幹産業の林業が衰退したことから、農協では昭和 40 年頃からユズ栽培に取り組んだ。しかし、高齢化で手入れが行き届かず、見栄えの悪いユズは青果販売には向かなかった。そこで東谷課長（当時）が手掛けたのが加工品販売。県内外の物産展に出向き、ぽん酢しょうゆやゆずドリンクなどの販売に力を注いだ。

そして今では農協職員約 100 人、年商 30 億円余りを売り上げるまでになった。東谷前組合長が課長時代から今日まで取り組んできたユズ加工にかける思いや苦労話など、今回は貴重な話を伺うことができた。その中で、成功に結び付いた３つのポイントとは・・・。

① 村の施策が林業中心で、農業に期待していなかったことに「何くそ」と頑張りぬいた。
② 村や県・国などからの補助金で施設整備等ができるのに、民間に負けるわけがないと思った。
③ 今ではありえない 24 時間戦いますの精神で、モノづくりを行い物産展に参加した。

規模が小さいゆえにいろいろ馬鹿にされ、反骨心をエネルギーにしていったらいつの間にか現在の職員数と年商につながったのだという。

巧みな広告戦略　～イラストやネーミングが絶妙～



馬路村の広告戦略は実にユニークで巧みだ。商品販売のパンフレットにはモデルの女性を起用するのが一般的だが、馬路村でパンフレットやポスターなどに登場するのは村のおじいちゃんやおばあちゃん、子どもたちが中心で、とても微笑ましく温かみが感じられる。

また、馬路村では観光案内板やポスター、カレンダー、パンフレット、さらにユズ加工品のラベルなどには実に個性的なイラストと筆文字が描かれている。この独特の筆文字は「馬路村フォント」と呼ばれているらしいが、そのネーミングが絶妙だ。主力商品のぽん酢しょうゆは「ゆずの村」。ユズを加工したジュースは「ごっくん馬路村」。ゆず唐辛子は「ぱっと馬路村」。焼き肉のたれは「今日は焼肉馬路村」などといった具合。そのほか馬路ずしの素、ゆず酢ドレッシング、青オニゆずこしょう、ゆずジャム、ゆずマーマレード、ゆずゼリー、ゆず茶漬け、ゆずふりかけ、ゆずみそ等など。このほかに入浴剤や化粧品、シャンプー、ボディソープ、リンス、タオルなどまで手掛けていて、その品数の多さにも驚いてしまう。ちなみに馬路温泉の朝食の箸袋には「おはよう。昨日はちゃんとねれたかえ。ねえ、ごはんたべたら、いっしょにあそばんかえ」などというメッセージとイラストが描かれていた。（左）

産業がなければ創ればいい　～土佐ジロー（鶏の品種）による地域づくり～

山崎村長

菅原代表

小松社長

菅野前飯舘村長

交流会 2 日目は講演会や事例発表、団体の近況報告などが行われた。最初に山崎出馬路村長が「2日間の交流会が参加者にとって思い出深いものになるように精一杯努めたい」と歓迎のあいさつ。
続いて東谷望史前組合長の講演（前頁）。次に 200 号をもって廃刊することになった地域づくり情報誌『かがり火』について、代表の菅原歓一さんが自身の病気入院やコロナ禍などが廃刊のきっかけになったことに触れ、各地で頑張っている無名の人に光を当てる取材方針を貫いてきた 34 年間を振り返った。

そのほか安芸市畑山の㈲はたやま夢楽（むら）社長 小松圭子さんが土佐ジローにかける地域づくりの思いを発表。愛媛新聞記者から土佐ジロー農家へ嫁いだ異色の経歴を持つ小松さんは「自然の中で、生かされていることを実感できる暮らしをしたかった。産業がなければ創ればいい」と土佐ジローの炭火焼きを提供する宿を造ったことにより、70 人の集落に 800 人が訪れるようになったことなどを話した。

最後には参加者からの報告会が開かれ、前回開催地の福島県飯舘村の菅野前村長は「平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災による福島第一原発事故により全村避難を余儀なくされた。しかし、悲嘆にくれたり愚痴を言ったりしているだけでは何も解決しない。までい（真手）という言葉が表すように、丁寧に、手間暇かけて心を込めて復興を成し遂げたい」と現状を述べた。

千本山の天然魚梁瀬杉（やなせすぎ）　～樹齢は 200 年から 300 年～

千本山の魚梁瀬杉

2日目には村内視察が行われ、私たちは千本山・森林鉄道ツアーに参加。馬路村もかつては木曽と同様、魚梁瀬杉の搬出のために森林鉄道が走っていた。明治 44 年に国内 3 番目の森林鉄道として開通し、昭和 38 年まで木材だけでなく人や生活物資を運んだ。私たちは復元された森林鉄道に体験乗車することができた。

そのあと、千本山を見学。その昔「数えきれないほどの木のある山」としてこの名がついたらしい。日本三大杉美林と呼ばれるこの森には、樹齢 200 年～300 年もの天然の魚梁瀬杉がそびえ立ち、赤沢自然休養林のような迫力があった。

海や川、山の幸が満載の交流会　～カツオのたたきやアユの塩焼き等に舌鼓～

交流会の料理を準備するスタッフ

今回の交流会で参加者がとても楽しみにしていたのが前夜祭と翌日の夜の交流会だった。前夜祭は馬路温泉横の川原で行い、翌日の交流会はゆずの森駐車場で行われた。会場では天然アユの塩焼きやカツオのたたき、焼きサバ寿司、赤牛の焼肉、キンメダイの煮つけ、土佐ジロー（鶏）の炭火焼き、ゆず寿司、手作りコンニャク等など多くの海や川、山の幸が振る舞われた。参加者は、普段は口にできないような美味しい地酒と料理に舌鼓を打ちながら全国の仲間と交流を深め合った。裏方として会場の準備や片付けをはじめ、心のこもった温かいもてなしをしてくださった農協や役場職員などスタッフの皆さん、馬路村の住民の皆さんにあらためて感謝を申し上げたいと思う。

カツオを藁で焼いてたたきを作る

はりきりご長寿列伝

平田（ひらた） 春男（はるお） さん（87歳・上松町）㉑

平田 春男さん

高齢にもかかわらず現役で仕事をしている人や自分の趣味を大いに楽しんでいる人など、元気あふれるお年寄りを紹介します。今回は上松町瀬木の平田春男さんです。
なお、この様子は５月１１日にNHKテレビのイブニング信州で放映されました。

色を付けるわくわく感がたまらない　～絵画教室に 28 年～

２０代の頃は、トラックに乗って開田高原の白菜を大阪まで運んだり、木材を名古屋まで運搬したりしていた。その後は地元でホテルの営業や瑞浪でテレビの製造に携わったこともあるという平田さん。６０歳で定年退職後、当時の公民館長の勧めで絵画教室に入り油絵をやることになった。「毎月１回の絵画教室に通い始めてすでに２８年になるが、全く上達していない」と笑って話す。教室の仲間は指導の先生も含めて６人だが、林さんが一番の年高で、今年度から教室の会長を務めている。

油絵は「キャンバスに鉛筆で絵を描き終えたときの満足感やこれから色を付けるというわくわく感がたまらない」と平田さん。絵の題材は御嶽山や木曽駒ケ岳、木曽川など木曽の自然が中心。特に御嶽山は「厳しい冬と春から夏にかけて雪解けの穏やかさが何とも言えない魅力」と話す。

自宅で絵を描く平田さん

６０歳の時に初めて描いたのは木曽馬で、現在は開田高原から眺めた残雪の御嶽山を制作中だ。「毎朝、絵筆をとるのが日課で、絵がないと朝が明けない感じ。絵はお守りみたいなもの」と笑う。３月３１日から４月１４日まで上松公民館で絵画教室の作品展が開かれた。そのほか関西電力や民間の薬局のギャラリーに作品展示することもあり張り合いになっているという。

長寿の秘訣は「絵を描くことはもちろん、認知症予防の講演会などに参加し、そこで学んだことを実践すること」。また、『毎日がアルツハイマー』などのビデオを見るなどして予防にも努めている。そんな元気あふれる平田さん、今後については「上松町には木曽八景のうち『寝覚めの夜雨』や『小野の瀑布』『桟の朝霧』など５つもある。その中の一つ『風越の晴嵐』をぜひ描いてみたい」と夢が膨らむ。

私の本棚　『ごっくん馬路村の村おこし』

（大歳昌彦 著・日本経済新聞社）

地域おこしアドバイザーで、開田高原大使を務めたこともある大歳昌彦先生が平成１０年に著したもの。四国の高知県馬路村は高知市から車で２時間ほどかかる山の中。耕地が狭く村の産業と呼べるものは柚子くらいしかなかった。その柚子の加工品に情熱を注いだ農協職員・東谷望史課長の熱き挑戦が描かれている。当時１２００人の村で柚子加工品の売上が１８億３千万円、通販顧客が全国に２５万人というから驚いてしまう。私も２０年以上にわたり毎年柚子商品を注文しているが、いつも大きな刺激と感動をいただいている。地域づくりは故郷に対する熱い思いとやる気、そして遊び心だと教えてもらった。

編集後記

６月に全国まちづくり交流会が馬路村で３年ぶりに行われ、抗原検査を受けて参加した。その後、感染者が減ったので、ようやく収束に向かうのではと期待したが、再び拡大して今に至っている。当たり前の日常を取り戻せるのはいつになるのか。先が読めない状況がしばらく続きそうだ。もう少しの我慢か・・・。

編集・発行者：　大目 富美雄（おおめ ふみお）

〒397-0301　木曽郡木曽町開田高原末川５190 番地
電話& FAX　0264-42-3661
携　帯　090-2526-7156
E-mail　info@ome-fumio.com

Facebook